

仏教企画通信

発行日 | 令和5年1月1日

70号

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

「強い国家」を 目指す争い

ロシアによるウクライナ侵攻によって明らかになったことのひとつは、国家がもつ負の側面だった。国家があるかぎり対立が起こり、それはときに戦争や侵略へとつながっていく。かつて政治学者の大熊信行は、国家は必要悪だと論じていた。必要なものだけども悪だということである。国家には「悪」という側面があることを認識し、その「悪」をどう封じ込めるのかを検討しないと、「悪」がフリーハンドをえてしまう。

プロセスのなかにウクライナへの侵攻もある。

だが、国民がプーチンを支持しつづけた要因もまた、プーチンが強いロシアを復活させつつある人にもみえたからだった。ソ連崩壊後の混乱と国家の弱体化を食い止め、再び強国ロシアを復活させつつある指導者。多くの国民にとってプーチンはその国民の大多数はプーチンを支持してきた。とともに強国としてのロシア復活のプロセス上にあるのがウクライナの併合であり、とりわけロシア帝国をつくったピョートル大帝がオスマントルコから奪ったクリミア半島は、強国ロシアにとっては譲ることのできない自国の領土だった。

戦争と 国家に ついて 考える

戦争なき世界をつくるには

内山 節

維持してきた。すなわち強い国家の建設を望む人々や、国家の下での自分のポジションを維持しようとする人々たちによって国家は維持され、プーチン政権は持続してきた。この基盤の上にウクライナへの侵攻があったのだから、それはロシアという国家の戦争であり、国民の戦争でもあった。

ところで、近代国家と近代以前の国家とはひとつの違がある。それは近代国家の政治権力は国民の支持を必要とするということである。プーチンでさえ選挙で選ばれた大統領だった。

国民の自由な支持があったとはいいたい。だがこのことをも含めて、強い国家を再建しようとするプーチン政権の試みを、多くの国民は支持してきたのである。自由ではない社会への批判よりも、復活するロシアへの期待の方がまされた。このような理由で、プーチンは国民から支持されてきた。

同じことが今日の中国にもいえる。中国はロシア以上の監視社会であり、言論の自由も存在しない。それなら中国の国民は批判をもちながらも黙っているのかといえ、多数派はそうでもない。現在の中国には「中国の夢」と書かれた看板が至る所に掛けられているが、「中国の夢」とは政治的には世界を指導する中国ということである。世界に冠たる中国の建設に向かって前進している。そしてこの路線もまた国民に支持されている。だが国民にとってそれ以上重要なものは、経済的に豊かになることであり、資産を増大させることである。この欲求と「中国の夢」は矛盾しない。人々には、世界に冠たる中国を建設することと経済発展は一体のもののように受け止められているからである。自由のない監視社会という現実を甘受しても、そのことによって急速に経済が発展するのなら、中国国民の多数派はこの現実を受け入れることができる。そういうかたちで、中国政府には国民の多数派の支持があるのだと思った方がいい。

国家は常に強い国家であるとする。そのことによつて国民の支持がえられることを知っているからである。もちろん世界には強い国家など望みようもない国も多数存在する。だが残念なことに、そういう国の多くは不安定な社会を生み出している。

この強い国家を目指すという傾向は、いわゆる西側諸国でも変わるものではない。ただしこれらの国では「強さ」の内容が多様化している。軍事力以上に重要なのは経済力であり、日本でもかつては経済的に発展した日本が、日本の強さを多くの人々に感じさせたはずである。さらには何かの領域で主導権をとることも重要になった。それもまた例えば情報分野で主導権をとるとか、人権問題で主導権をとるとか、再生可能エネルギーや電気自動車の分野で主導権をとるとかさまざまであるが、ここにも「世界を牽引する我が国」というかたちでの強い国家の演出がある。国家にとつては、強さこそが国民をまとめていく重要な方法なのである。

とすると次のように考えることができる。それは強い国家を目指す争いが、近代国家には内蔵されているということである。軍事力であれ経済力であれ、さらには何らかの領域であれ、国家は常に勝ち抜こうする性質を内包させている。そしてそれは、ときに対立を生み、ときに勝ち抜くための協調を生み出しながら、根本的には対決する世界をつ

くりだしてしまおう。

国家・国民をつくりだすもの

ところで、国家とは一体何なのであろうか。このことを考える上でも、ウクライナの歴史は多くのヒントを与えてくれる。プーチンはスラブ系のロシア人、ペラールシ人、ウクライナ人は同じスラブ人、あるいはスラブ民族であり、一体化した社会をつくるべきだと考えているようである。ところが実際には、スラブ人とは何かは明確なものではない。生物学的な意味における人種、民族としてのスラブ人は存在せず、スラブ人とはスラブ語系言語を使う人々ということ以上のものではない。このような意味におけるスラブ人の始原はつきりしないのだが、有力な説としては、六〇〇年代に現在のルーマニアで暮らしていた農耕民ではないかと考えられている。その人たちが東欧、北欧へと移動しながらスラブ語系言語を広めていった。

現在ロシアにいるスラブ人は、ノルウェイから移ってきた人たちらしい。その人たちがロシアの大地で社会の支配的な立場を確立した。その上で九〇〇年代にウクライナにキエフ公国が成立し、ロシア・ウクライナの社会の中心になった。とともにキエフ公国は東方正教会系のウクライナ正教会をつくり、宗教的にも独自の社会をつくりだした。



このキエフ公国は一二〇〇年代にモンゴル人の侵攻を受け、領地の大半を失う。このときウクライナ正教会は本部をモスクワに移し、それが今日のロシア正教会の母体になっている。現在のウクライナの大地は、その後、ポーランド、ラトビア、オスマントルコなどに、大地の一部、もしくは大半を占領され、前記したようにクリミア半島などはロシア帝国をつくったピョートル大帝によってロシア領になった。

このような歴史のなかでは、今日の意味におけるウクライナという国家は、ロシアもまたそうであるように、存在しなかったといつてもいい。もちろんウクライナをつくろうとする人たちはいた。だがウクライナもロシアもたえず変動する国境線とともにあり、国内には若干の商工業者を除けば、権力者と農奴的な農民が存在していただけである。

このような世界で一九一七年にロシア革命が起こり、各地で内戦が起こった。このときウクライナはボリシェヴィキ(ロシア共産党)の指導下にあった赤軍と対立する白軍の拠点になる。この白軍は赤軍に敗北し、後にウクライナは

ソ連に併合された。ところがウクライナは、スターリンが支配するソ連の下で抑圧と弾圧にさらされた。多くのウクライナ人が殺され、穀物を奪われて餓死した。このことへの反発がウクライナ人意識を生み出していくことになる。第二次大戦中には、ソ連と戦うナチス・ドイツと連携して独立を目指す動きも生まれ、最終的にはソ連の崩壊を経てウクライナは独立した。いつてもウクライナの領土内にはかなりの数のロシア人も暮らしていたし、相互的な親戚関係をもち人も多い。ところが二〇一四年にロシアはウクライナへの侵攻を開始し、クリミア半島などを併合する。それはロシアに反発するウクライナ人意識を高める役割をはたした。さらに今年のウクライナ侵攻によって、国家としてのウクライナと国民としてのウクライナ人が、不可逆的なものとして確立されたのである。ロシアの度重なる蛮行が、ウクライナという国家と国民をつくりだしたといつてもよい。

この歴史は、国家や国民が明確な実体でも、歴史貫通的なものでもないことを教えている。国家はそのときどき政治的諸関係のなかでたえず再創造されていくといつてもよい。日本でも近代的中央集権国家が生みだされていくのは明治時代になってからであるが、それは世界の列強が植民地の争奪戦を繰り広げる帝国主義の時代の政治的諸関係がつくりだしたものだとい

つてもよかった。

争いの背後の「関係性」に目を向ける

本質的には国家や国民に本当の実体はないのである。本質はそれをつくりだした関係の方にある。ところが創りだされた国家はさまざまな機能を確立していく。軍隊や警察制度をつくり、さまざまな法体系を整備していく。そのことによって私たちはこの国家の機能から逃れることができなくなっていく。思想として国家を否定したところで、税金は払わなければならぬし、法を犯せば逮捕される。海外に行くためには政府が発行したパスポートが必要になる。私たちは機能に組み込まれた個人だという意味で、国民でなければならぬのである。とともにもうひとつ国家にとって重要なことは、国民が国家を自分たちの国家だとして認める意識を高めることだ。その方法のひとつが、いま我が国は強い国家の形成過程にあるという意識の醸成だった。

戦前の日本をみても、日清、日露の戦争に勝ち、世界の列強の一角を占めるに至った強い日本というところが、優秀な日本人という意識と一体化しながら、国民の国家への統合を進展させていった。軍事的、政治的であれ、経済的であれ、さらには自分たちは世界で最も優れた文化をもっているという幻想であれ、優れた国家、強い国家という幻想が国家を強固なものにして

いるといつてもよい。ところで、国家の本質は、国家を再創造させていく関係の方にあると述べたとき、このとらえ方は大乘仏教の思想と共通することに気づかされる。紀元二〇〇年代に登場した龍樹(ナガールジュナ)は空の思想の大成者であり、彼自身も大乘仏教は確立されたと評する人にもいる。龍樹の思想は、実体としてみえているものは本質ではなく、本質は実体を創りだしている奥にあるものだというところから出発している。その奥にある本質は合理的な認識からとは考えられないものであり、その意味で空である。ただしこの考えから、あらゆるものを創りだしている本質は靈魂だというところが生み出されていったのだ、と。

もちろん仏教は、本質は靈魂だと述べているわけではない。だが、とらえられない本質が実体を創りだしているの視点ではさまざまな「原始文化」と共通する。龍樹が確立した思想はこのことにあるのではなく、本質を相互的な関係としてとらえたことにある。この世界はさまざまな関係によってつくり出されている。しかもそれは私とあなた

の關係だけでなく、背後には私を創りだしているさまざまな関係があり、あなたを創りだしているさまざまな関係もある。そうやって徐々に背後にある関係を探っていくと、そこにはあらゆるものが結び合っている本質の世界が感じられてくる。とすると個別の実体は虚無であり、本質としての関係の世界はとらえようのないもの、個別性を超えた普遍として存在していることになる。この普遍の関係に法の世界をみる、すなわち仏の世界をみいだしたのが、龍樹が追求しようとした空の思想ではないかと私は思っている。とすると、戦争なき世界をつくるにはその背後にある関係を変えるほかない。国際的にも国内的にも、どのような関係をつくったら戦争なき世界が創造できるのか。そしてその先に求められるのは、国家は不可欠の実体ではないのだということへの認識、すなわち現実的には国家のもつ機能から逃れられないとしても、そこに存在の本質はないことの認識だと私は思っている。



内山 節(うちやまたかし) 哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』(全15巻、農文協)『半市場経済成長だけではない「共創社会」の時代』(角川新書、他多数)。

世の中には多くの宗教が存在します。それぞれの宗教が、それぞれの理念に基づきながら、人々の抱える問題にどう応えていくのか。混沌の時代を迎えているいま、まさにそれが問われていると思います。一方で、さまざまな宗教が存在するがゆえに、そこからさまざまな問題が発生して、くることもまた事実です。

そうした宗教と人間とのかわりの中で、にわかに旧統一教会(現世界平和統一家庭連合)の問題が出てきました。『仏教企画通信』は小さな冊子ですが、オウム真理教の事件も経験してきました。その時に「仏教界はもつと社会に向けて発信するべきだ」という声もあり、それはわれわれに与えられた課題でもあると感じてきました。また、これだけ大きな問題になると、曹洞宗の檀信徒の方にも、なにかしらの影響があることも考えられるでしょう。

そこで今回は急ぎよ、宗教学の立場からカルト教団の研究もされている正木晃先生、そして学生時代に新興宗教の調査をされた中村瑞峰師にお越しいただきました。この問題を、われわれ寺院の住職はいかに受け止め、対応していくべきか。ともに考えていきたいと思えます。

旧統一教会の教義とは どのようなものか

藤木一まず、中村さんが旧統一教会に関心を持たれた経緯をお話しいただければと思います。

ます。中村一私が旧統一教会を知ったのは、昭和五五(一九八〇)年都内の駅頭で、同じ大学の法学部の男子学生からアンケートを受けたことがきっかけです。近くに教会があるからと言われて行ってみると、女性

座談会

旧統一教会の問題から、お寺と住職の役割を見つめ直す

正木晃(宗教学者) 中村瑞峰(曹源寺住職) 藤木隆宣(仏教企画代表)

信者が何人もいて、「お帰りなさい」と言われました。それがすごく優しいんです。ここにこして、作り笑いじゃないんです。壁に大きく「地上天国実現」と横書きで張ってありました。印象に残っているのは年配

の女性の話で、「教会に通う時はいつも、駅のホームに着くとすぐ電車が来るし、信号は青になる。まるで神様に導かれていくようだ」と。皆がここにこっているのを見る。近くにいる私が悪い人間のように、すごく違和感がありました。

藤木一旧統一教会では、どのような教えが説かれているのでしょうか。

中村一従来のキリスト教だと、神はアダムとイブを造り、そこから生まれたのが人類だと言っていますが、旧統一教会では、エバ(イブのこと)は最初に悪魔とセックスをしている。だから人類は悪魔の子であり、それを教祖夫妻が神の血脈に戻す、という教えなのです。また、『原理講論』(旧統一教会の基本経典)には、戦時中、日本が朝鮮半島に対してひどい事をしたと殊更に強調して、日本人信者に加害者意識を植え付け、贖罪意識を高める箇所があります。

正木一旧統一教会は、キリスト教の皮をまとっています。根本的には朝鮮半島のシャーマニズムと深いかわりがあると思います。病氣治しとか悪魔払いとか、そういう現世利益のなところと絡んでいます。近代化がいいか悪いかは別として、近代化に伴って日本ではそういったものがほとんど消えた、というよりも目につかなくなったのかもしれない。いずれにせよ、朝鮮半島のシャーマン、すなわちムーダンのような激しさはなかったようです。

「いい人が信念を持ってやっている」

霊感商法の実態

藤木一旧統一教会については霊感商法も問題になっていますね。

中村一学生時代、アパートの二階で、真夜中の十二時、トントンとノックの音がしてドアを開けたら、人の良さそうな同年代の男女が立っていて、「印鑑は要りませんか。今買ったらすごく幸運になります」と言う。その時は霊感商法の事は知らなかったんです。「値段は十万円です」と言うから、私は冷蔵庫を開けて「見てみる。牛乳しか入っていない。買えるわけないだろう。まあいいから、お茶でも飲んでいけよ」と言って、男性と

は明け方まで話しました。女性はずっとまっすぐ眠っていました。七十二時間、眠らないで販売をする三日目だったようです。彼らは信者でして、珍味売りや、印鑑販売など、ポツクスカーに信者を乗せて派遣するやり方です。

正木一私の友人のいとこ(日本人)がソウルに住んでいて、霊感商法で有名になった「壺の販売」のキャップみたいな役職についていました。彼らは信念を持って壺を販売している、少なくともご本人は、いんちきなものを売っているという認識は微塵もない。

「この壺を買えば本当に救われるはずだ」と信じ切っているようなのです。そこがこの種の問題を考えると、最も重要なポイントだと思います。

中村一世直し型の新興宗教にはまる人は、純粋な人が多いです。私は世に「洗脳研修」と言われる三日間の研修会を調査しました。参加者は、二十歳前後の男女、約一〇〇名話してみると非常に真面目で、真剣に「自分は何で社会に貢献できるだろう」と考え、何かを希望していました。青年期特有の悩みですが、みな地方出身者で、周りに相談する友人はいないようでした。彼らは、自らの不安を解消してくれる教えに従い、同じ価値観の人たちとの集まりを享受し、善本位で物事を考える傾向があります。しかし、カルトの二重構造といわれるように、組織側と一般信者側では一線を画するものがあります。

一つの価値観に縛られる 宗教カルト

中村一旧統一教会では、「神の真理を学ぶとサタンが寄る」と言います。どこに寄るのか。身内に寄る。だから身内が騒げば騒ぐほど、遠のくんです。彼らにしたら、「神様の教えを広めようとしたからサタンが邪魔をした」となる。キリスト教という受難。試験があればあるほど、信仰が深まります。

正木一仏教の例をあげれば、法華経が典型例です。「正しさがゆえに邪悪な勢力の怒りがかって弾圧され、試験があることは、自分たちが正しいということの証明である」とよく主張します。

中村一法難とか言いますね。ただ、昔と違って現代日本では、お決まりのその図式を意図的に利用しているように感じます。

正木一神教の場合は神が絶

対化されますから、「神がい

「アメリカへ伝道に行った信

「正木一自民党との関係で話題

「断言すること」が持つ

強い影響力

正木一旧統一教会の教義はマ

られますから、何を質問して

「中村一私は特に「青年期の宗

「正木一言葉によつて、筋道を

「日本のお坊さんで、相談

仏教は「行」。

行なき仏教はあり得ない

藤木一何か原因不明(身内の死

「原因はここにある」とはっ

「中村一私が一時期よく受けた

「正木一歴史を振り返ると、日

藤木一

藤木一そうした霊的な問題に

の問題を考える上でも重要な

「正木一やはり仏教は「行」で

「中村一曹洞宗では、日常の事

「正木一行住坐臥が全て修行だ

藤木一

藤木一霊的な問題はすごく難

それがお札だったり、呪文だ

「これからは「仏教的生き

「中村一住職の強みは、境内伽

「正木一そう、プロデューサー

いま仏教者が

問われていることは

人については、そもそも完璧

「中村一われわれの出来る事は

「正木一それにしても、オウム

「藤木一正木先生の意見を私

藤木一

藤木一それができず、お坊さん

私は薬学から仏教学に編入

- ・苦(病状)
・集(病因)
・滅(健康態)
・道(治病健康法)

とてもシステマチックな考

薬学から

見える

仏教の魅力

太瑞知見

「四諦は人びとの苦しみ悩み

「お釈迦さまの説法のアイデ

私は禅寺に生まれ、幼少期

「四諦は人びとの苦しみ悩み

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

薬学から

仏教学へ

「お釈迦さまの説法のアイデ

薬学から

仏教学へ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

仏教と伝統医学

「お釈迦さまの説法のアイデ

周知のように

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

伝統医学

「お釈迦さまの説法のアイデ

中医学(漢文)

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

「お釈迦さまの説法のアイデ

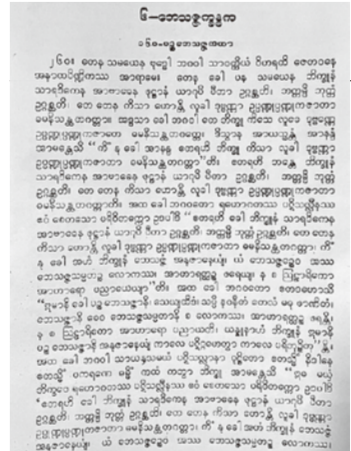
「お釈迦さまの説法のアイデ

アールヴェーダ医学(サンスクリット語)

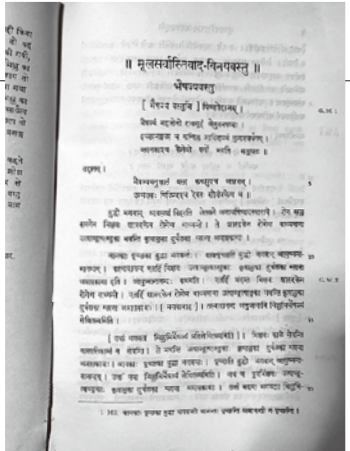
「お釈迦さまの説法のアイデ

パーリ語テキスト(ビルマ文字)

「お釈迦さまの説法のアイデ



パーリ語テキスト(ビルマ文字)

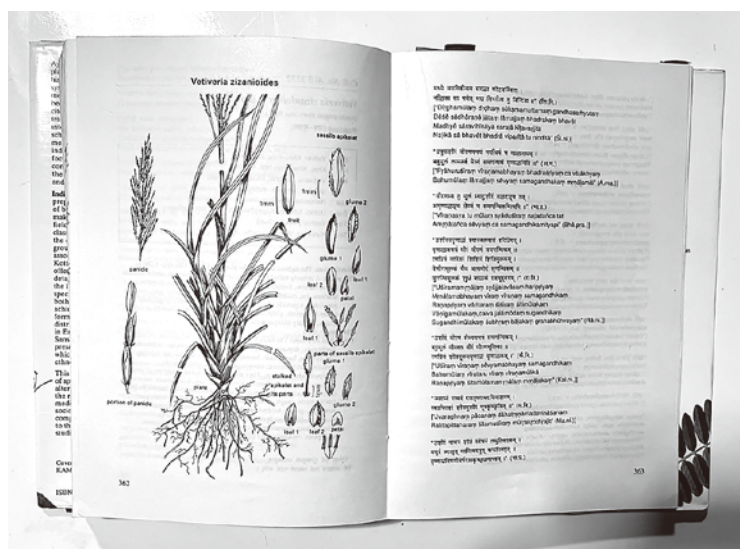


サンスクリット語テキスト

ろうかと、ワクワクした。こ
うやって、仏典と伝統医学書
を両脇にかかえ、仏典に記さ
れている薬を追い求める旅が
始まった。

仏典の中の医学

ここで実際に仏典の中身を
みてみよう。前述のように律
には「薬の章」がある。その
冒頭には修行僧たちが病に罹
ったことが記されている。こ
れを漢訳では「秋月病」や
「秋時病」、「秋時染疾」と記
している。一方、パーリ律で
は「saradika abahā」、サン
スクリット語では「Saradaka
rogā」、チベット語律では
「ston kai nad」と表記して
いる。三つ共に「秋の病」と
訳すことができる。複数の律
が共通して、仏教僧団で秋に
生じやすい病が流行した、と



インド薬草辞典

書いてある。修行僧たちは嘔
吐し、やせ細っていった。
この病に対する解説が、
「論蔵」に記されている。
「秋の病とは、秋の時期に生
じるピツタ(pitta)の病であ
る(拙訳)」
なんと！これはインド伝
統医学、アーユルヴェーダの
知識がないと理解ができない
内容ではないか！
アーユルヴェーダでは、人
間には三種の生理機能があ
るとされる。それをトリ・ド
ーシャといい、次の三要素か
ら構成される。

- トリ・ドーシャ(tri-dosa)
1 ヴァータ(vāta)
2 ピツタ(pitta)
3 カパ(kapha)

これら三種のドーシャのバ
ランスによって、健康が保た
れるとされる。

なんと、この
「ピツタ」とい
うアーユルヴェ
ーダの用語が論
蔵に登場し、病
気の説明に使用
されている。こ
れは驚きの発見
だった。もしか
すると、お釈迦
さまもアーユル
ヴェーダの理論
をご存知だった
のかも知れない。
そういうえば、
「四諦」の教え
は「医者が病人
を治療する方法
原理に従ったも

のといわれる」と書いてあつ
たな。やはり仏教と医学の親
和性は高いようだ。
さらに面白い発見もあった。
初転法輪では四諦の教えに引
き続き、「三転十二行相」が
説かれるのだが、これは四諦
のおおのについて、三つの
段階を示したものである。

- 三転
1 示転(理解)
2 勸転(実践)
3 証転(理解と実践の整合)

つまり、四諦の教えは、ま
ず理論的に理解して(示転)、
その理論に従って正しく実践
し(勸転)、それから理解と実
践の整合性を確認する(証転
の)だという。
なるほど、なるほど。まさ
に薬学の学生実習がそうだつ
た。指導教官の話聞いて理
解し、メモを取る。それから
実際に実験を行ない、理論と
実際の反応を確認する。なぜ
そうなったのか、立ち止まっ
て考えてみる。繰り返し行な
い考える。精度を高める。ま
た確認する。
理解しただけでは十分条件
ではないのだ。実験をして理
論を確認することが大切なよ
うに、お釈迦さまの教えも、
頭の中の理解だけではなく、
自分の体を通しての「うなず
き」が大切だということだろ
う。

ここでハツと気がついた。
私には仏教の実践が足りない。
修行が必要だ。私は修士論文
を書き上げると、修行道場へ
向かった。

お粥の功德

修行道場では驚きの連続だ
った。律の内容が日常の中で
生きていた。一例として「朝
粥」をみてみよう。
朝粥では、恭しく「粥時呪
願」を唱える。
「粥有十利(しゅうゆうじり)
饒益行人(にょいあんじん)
果報無辺(こほりぶへん)

究竟常業(きゅうじょうじょうじょう)
これを、ただの呪文のよう
に聞いていたのだが、この偈
の文字面を読むと、なんと、
「お粥には十の利益があるん
だよ」と書いてあるではない
か！毎朝、これから頂くお
粥の効能を唱えて、それから
恭しく食していたとは！
パーリ語の律の中でも同様
に、お釈迦さまはお粥の功德
を十項目挙げられている。拙
訳で恐縮だが紹介しよう。

- 粥の十の功德
1 寿命を与えます
2 美貌を与えます
3 安楽を与えます
4 力を与えます
5 弁才を与えます
6 飢えを除きます
7 渴きを除きます
8 ヴァータを順調にします
9 下腹を淨化します
10 未消化の残留物を除きます
(Vinaya, Mahāvagga) 拙抄訳

すごい効用ばかりだ。さす
がはお釈迦さまお勧めの食事
である。
さて、ここでもアーユルヴ

エーダの用語
が登場してい
ることに気が
つきだろうか
8の「ヴァー
タ(śūka)」だ。
前述のトリ・
ドーシャのひ
とつである。
これはしばし
ば「風」と漢
訳される。そ
のため、粥の
効用として「風除」と記され、
「風邪をひかないようになる」
と和訳されることもある。し
かし、パーリ語からみると、
「ヴァータを整え(体調をよく
する)」という意味にとらえ
るのが良いと思う。
また、最後の「未消化の残
留物」も注目だ。パーリ語で
は「ana-daseśam」と記さ
れている。実はこの「ana(ア
ーイ)」が問題で、アーユルヴ
エーダではアーマは未消化物
と訳され、これが体内に蓄積
されると体調を悪くする原因
となると考えられている。そ
のアーマを取り除く効果が、
粥にはあるという。実際にア
ーユルヴェーダでも、粥にそ
のような効果があると言われ
ている。粥はすごい食事なの
だ。



チベット語医学書『四部医典』

ここで、科学をやっていた
者から見える仏教の魅力を、
少しだけ書き記してみた。
毎日仏典を読んでいると、
面白い発見がたくさんある。
仏教は魅力に溢れている。私
はその魅力を、曹洞宗宗務
刊『てらスクール』の「仏教
語り草」に毎月書いているし、
また、アーユルヴェーダ医師
との対談「日々のからだ」を
『禅の友』で偶数月に連載し
ている。この話の続きはそち
らでも楽しんでいただけたら
と思う。



大瑞見(たいずいけん)
長崎県玉峰寺住職、薬剤師。
九州大学大学院、駒澤大学大
学院修了。著書に「お釈迦さま
の薬箱」(河出書房新社)があり、
曹洞宗宗務刊「てらスクール」
『禅の友』で連載中。

宗教人類学者・佐々木宏幹
は1970年代以降の日本
の宗教研究に大きな足跡を遺
して来た学者であり、私ども
にとつてはきわめて信頼感の
篤い先達であった。20歳代の
大学院生の時期から導きを得
てきた私にとっては、「佐々
木宏幹先生」と記したいとこ
ろだが、ここでは敬称を略さ
せていただく。

92歳の今も健筆を振るつ
ておられる著者の、70歳代後
半から80歳代にかけての論考
を収録するとともに、著者の
業績を要約しつつその意義を
示す2編の凝縮された論考が
配置されている。今も宗教研
究に新たな展望を指し示す力
強い先達 佐々木宏幹入門の
書として、本書はたいへん有
益である。

「序」には、国際日本文化研
究センターの元所長である小
松和彦による「佐々木宏幹先
生の学問」が寄せられている。
小松は日本で「シャーマニズ
ム」という用語がこれほどま
でに共有されるようになった
ことは、佐々木宏幹の貢献抜
きには考えられないと言
う。「佐々木先生の研究が登場し
たことで、日本の「内向き」
だった宗教研究の景観がガラ
リと変わり、世界とつながっ
たのです」と述べている。

そして小松は、佐々木がシ
ャーマニズム研究に取り組ん
だのは、シャーマンが人々の
苦しみを救う存在だったから
だとする。そして、この同じ

まなざしが「生活仏教」の研
究にも展開していくという。
佐々木にはシャーマンに学び、
シャーマンのように人の苦し
みを救いたいという思いがあ
ったという。

先生の研究や講義、日頃
の言動には、そうした優し
い思いが漂い出ていました。
それは、曹洞宗の寺に生ま
れたがゆえに知らず知らず
に身につけていた、「宗教
家」ともいうべき佐々木先
生の「生き方」とも通じてい
たのではないかと思います。
実際、多くの学生が、多く
の人びとが、先生に救われ
たのではないのでしょうか。

私もそのように感じている。
共鳴するところの多い「序」
である。
収録されている、高見寛孝
の「佐々木人類学と日本の死
者祭祀」、佐藤憲昭の「佐々
木宏幹博士のシャーマニズム
論」もたいへん密度の濃い論
考であり、佐々木の業績の意
義が明確にかつ奥深く示され
ている。そして、この2論文
によって、佐々木が取り組ん
で来た研究領域の多くがカバ
ーされている。すぐれた編集
である。

だが、ここでは佐々木自身
の「宗教人類学からみた日本
の仏教文化」について紹介し
たい。この部分は約150
ページを占めるが、もともと
藤木隆宣が編集する「仏教企
画通信」に、2006年か

生活者感覚に基づく 宗教研究の新たな地平

佐々木宏幹編著『宗教人類学の地平』
仏教企画、2022年5月



東京大学名誉教授
島 蘭 進

NPO法人東京自由大学 ウェブマガジン「なぎさ」 宗教の名著巡礼 第3回より

ように論じられている。

考察の基点は、多くの仏教
論者、とくに仏教圏に取り組
んだ宗教人類学者が立ち止ま
った問いである。一方に、高
度の厳しい戒律を守り、長期
にわたる修行を行ったり、仏
典を読み込み仏教教義を理解

てもらうために「僧侶の力」
を必要とし、現世では自身お
よび家族の幸福実現と持続を
請い願って僧侶の力に頼るの
である(52ページ)。
エリートは仏教と生活仏教
に隔たりがある。ここでエリ
ートの僧侶や仏教学者に対し
て、佐々木が求めるものがあ
る。「僧侶はこうした人びと
の宗教的想いを大切に、こ
の想いに誠実に応えてやるこ
とが肝要ではなからうか(同
前)。現実にはそうなってい
ない。これを仏教研究という
側面から捉えると、「仏教研
究の対象が教理・理念面にの
み限定される傾向が強く、こ
のため寺院現場に展開する行
為・儀礼化された仏教は軽視
されるか無視される状況が長
く続いてきたこと(65ページ
になる)。
この状況をどう超えていけ
ばいいのか。そこで、佐々木
が注目する概念の一つが「仏
力」である。「世俗的な力(政
治力、経済力、文化力など)が限
界状況を呈したとき働きだす
のがこの力である。「聖なる
力」は「仏」に関係すると「仏
力」となり、「神」に結びつけ
ば、「神力」と表現されよう。
この宗教(仏教)特有の力は、
宗教(仏教)文化の基底を成す
ものであるが、宗教(仏教)が
学問化され、知的対象として
扱われるに従って、思想的性、
観念性、論理性を高めたにつ
れて軽視され見え難くなった
重要部分である(71-72ペー
ジ)という。

僧侶が「仏力」をもつてい
ることを人びとが如実に感じ
取っているとき、僧侶の仏教
と生活仏教はうまくかみ合っ
てそれが機能がする。とこ
ろが現代社会では、そこに齟
齟が生じるようになってい
る。「最近、葬儀や戒名にかかる
費用が問題になっており、大
都市では無宗教教育ならぬ「無
僧侶葬」が増えているという
が、この問題は僧侶のもつ
「仏力」が以前ほど人びとの
心を動かさなくなったことと
繋がってはいまいか(83ペー
ジ)と述べる。

「仏力」についての佐々木の
考察はさまざまに展開してい
て考えさせられるところが多
い。ここでは紹介できなかつ
たが、「ほとけ」という日本
語をめぐる考察も示唆深い
本書は他の書物でも深められ
ているこれらの問題がわかり
やすく紹介されており、いつ
しか佐々木宗教人類学の世界
に引き込まれていく。そして、
それは佐々木自身の人柄の魅
力に引き寄せられていくこと
とも感じられる。

そこで、以下のようにも考
えたくなる。読者は、実は
佐々木の仏力に魅せられてい
くのかもしれない。宗教人類
学の実践がそのまま生活者感
覚に基づく宗教の捉え返しで
あり、自ら宗教的なものを新
たに身近に捉え返すことにも
なるのだ。本書は、そのよう
な不思議な魅力をもった書物
である。

編集後記

藤木隆宣

内山先生に前号に続き世界平和の論考をお願いした。原稿から見えてくるものは世界平和を築くことの難しさ、地球に生きる人間の矛盾をどうするかだ。難しいからと言っ

住職地で簡単なホームページを開いているからか、「9月21日午後5時に引越しをするのでお仏壇の魂抜きをしてほしい」と電話が入った。少し忙しかったのと日時の変更があったりで断っていた状態であったが、最後まで付き合うと決めて世田谷区代田のアパートに伺った。鳥取県出身の30代女性で、他愛ない世間話にも応じてくれた。

をあげた。

私はいつも弊社発行の経本を持参し、一緒に読経をお願いしている。曹洞宗のことを少し話してお経を始める。難しい戒名であったので本人に確かめてご回向をする。頼んできた事情を聴くと両親が亡くなって、仏壇は自分が守っているようだ。おばあちゃんの話も少し出たので、ご回向では先祖代々とお唱えした。先ほどおばあちゃんの話が出ましたがどんなことですかと尋ねると、「いいえ大丈夫です」と慌てて答えた。

23日には引越し先の渋谷区西原のアパートに9時に訪ねた。曹洞宗の三尊仏が柱につりさげてあったので驚く。三尊仏はお仏壇の中にあるものですよと話すと、鳥取からとにかくあったものを持ってきたと説明する。何か不自然さを感じたが、突然若い方がお仏壇をお守りする立場にな

るとこんな感じかなとも思う。彼女の田舎は島根県境なので、両親は島根県の檀家だったようだ。拙寺から便りを年4回出しているからお送りしてもいいかと尋ねると、必要な時だけ依頼したいとのこと。なぜお寺に行くのかと尋ねるので、お寺は地域のコミュニティだからですと話す。不思議な顔をしていた。交わした会話から推測すると、彼女は何かしらかの新宗教のメンバーかもしれないと感じる。メールのやり取りを振り返ると丁寧な対応ではあったが、やはり違和感がある。お家の建て替えて仏壇の魂抜きはあったが引越して仏壇のおしよう抜き、開眼供養を依頼されたのは初めてだった。何もかも初めてだとこんな感じかとも思う。都会では檀信徒との関係が薄いので「我が寺」という関係が築かれるには時間とその関係性が問われる。お墓があるという関係ではなく、仏教的生き方を共にする関係を作らなければいけないと思う。秋彼岸だった。

2023春・彼岸号特集予告

2023年2月10日 発行予定

曹洞禅グラフ

164号

外国人の修行僧は 何に魅力を感じ 禅の修行に打ち込んでいるのか

お寺の奥様(寺族)を訪ねて

お寺で過ごす日々と色々な出会いがあるのだろうか。ご苦労や楽しみなどを取材します。

仏教企画発行の刊行物 (*部数により割引があります) すべて税別価格です

- 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円*
『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円*
『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円*
『葬送のしおり』 長井龍道著 30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円*
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説 300円*
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著 140円*
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著 150円*
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著 500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著 2,300円

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

発行日

Table with 2 columns: 発行日, 内容. Includes 春彼岸号 (2月10日), 夏お盆号 (5月30日), 秋彼岸号 (8月20日), 冬正月号 (10月30日).

Table with 2 columns: 部数, 価格. Includes 1部 200円, 9部以下 200円, 10部以上 150円に割引, etc.

手まり学園

寄附者御芳名 (敬称略) R4.8.15~R4.10.1

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名(個人名), 金額. Lists donors from Tokyo, Kanagawa, and Miyagi.

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

宗教人類学の地平

佐々木宏幹先生が『仏教企画通信』に執筆された玉稿より収録

佐々木宏幹編著 (駒澤大学名誉教授)

A5判上製・263頁 (別冊:A5冊子63頁・「写真が語るシャーマニズム」付き) 本体2,300円+税



お申込み 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp